

## 歴史資料講演会抄録

### 「尾張徳川家と尾張・名古屋」

（令和三年十月二十三日（土）愛知県女性総合センター）

## 尾張藩主の行う政務と儀式

### ―名古屋城の生活を垣間見る―

徳川林政史研究所所長

深井 雅海

ただいま御紹介にあずかりました、深井でございます。本日はどうぞよろしくお願いたします。

徳川林政史研究所の所蔵史料からどのようなことがわかるか、一端ではありますが、お話できればと思います。

テーマは、名古屋城における尾張藩主についてです。藩主の生活については、あまり詳しいことがわかっていません。特に政務については史料が少なく、尾張藩とは関係ありませんが、以前、加賀藩主の前田治脩（はるなぶ）の研究をした際は、治脩自身が書いた日記があり、そこからどのように政治に関わっていたかわかりました。治脩は特殊な事情で藩主になっており、二十七歳まで僧侶をしていましたが、急遽兄から藩主を命じられました。それまで政治とは全く関わりがなかったことから、最初の数年は詳しい日記を付けており、そこから藩主の政務を知ることができました。その日記は非

常に細かいことまで書かれており、例えば下級家臣の名前を変更するようなことまで上申されていて、驚いたことがあります。

尾張藩主も、政務についてかなりの上申案件があり、決裁をしていたと思いますが、残念ながら史料がないため、はっきりとわかりません。

そこで、本日は「御小納戸日記」という藩主の側近の日記と、「進饌要覧（しんせんようらん）大全」という儀式に関する史料を使い、藩主がどのようなことを行っていたかについて、お話ししたいと思います。

まず、名古屋城の構造についてですが、真ん中に本丸があり、その中に本丸御殿があります。西北に御深井丸（おふけまる）があり、その南に西之丸、本丸の東に二之丸があり、二之丸御殿があります。本丸御殿は元和元年（一六一五）に完成し、初代藩主の徳川義直が生活していました。ところが、義直はわずか五年ほどしか本丸御殿で生活していませんでした。元和六年（一六二〇）には、二之丸御殿に移っています。本丸御殿は使われなくなり、將軍が来城したときの御成御殿（おなり）になりました。それ以降は二之丸御殿が藩主の生活及び政治空間となりました。

詳しい状況を見ていききたいと思います。二之丸御殿は三つの空間に分かれています（図一）。

まずは藩主の執務・生活空間です。寝室から廊下を通って表の空間に出ると、表の空間の中心「中御座之間」で、執務を行っていたと考えられます。その側には藩主の側近である御小納戸の部屋があります。

次は儀礼空間です。儀礼空間は奥から夜詰之間（夜居之間）、対面所、広間の三つに分かれています。江戸城にも黒書院・白書院・大広間と三つの儀礼空間がありまして、黒書院が夜詰之間、白書院が対面所、大広間が広間に当たると考えられます。表に近いほど公式性が高くなります。

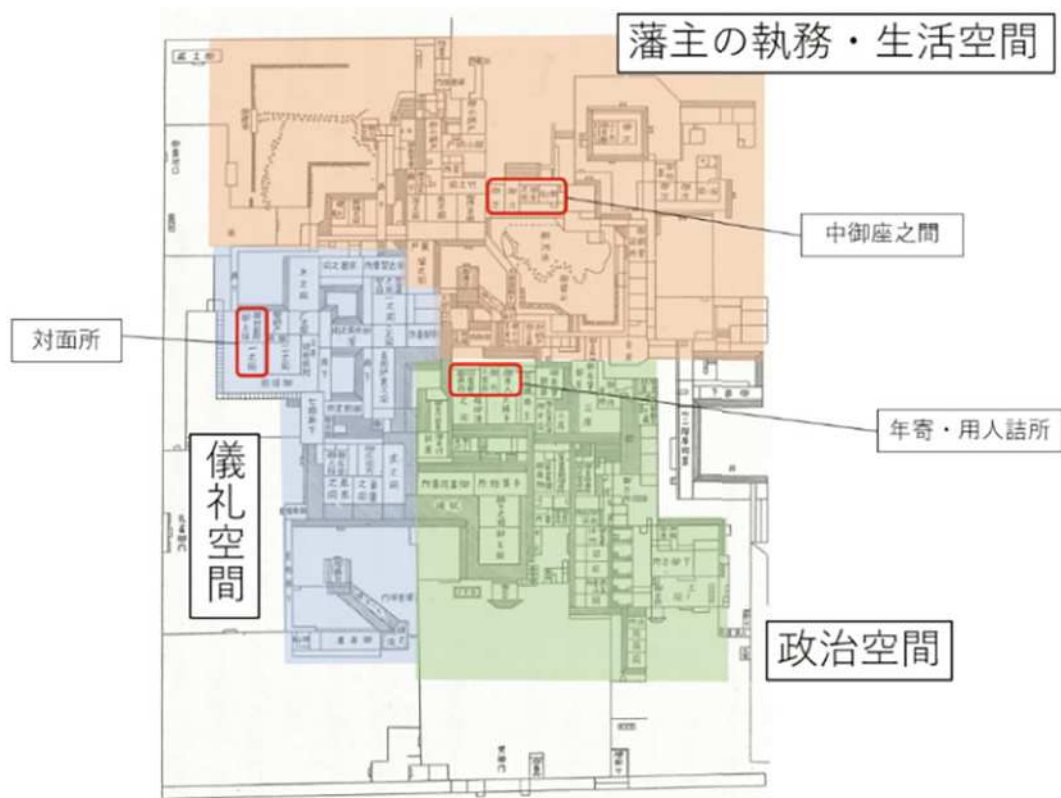


図1 二の丸御殿平面図 註：名古屋市編『名古屋城史』213頁の「二の丸御殿古図」より引用

次は政治空間です。他藩で言う家老に当たる役職の年寄と、用人の部屋が藩主の執務・生活空間のすぐ近くに設けられ、藩政を司っていました。大雑把ではありますが、二之丸御殿の構造はこのようになっていました。

今回は、藩主の執務・生活空間と儀礼空間でどのようなことが行われていたか、お話ししたいと思います。

まず、十二代藩主<sup>なりたか</sup>斉荘の生活を「御小納戸日記」を使いながら見ていきたいと思えます。藩主の側近としては、御小納戸と、藩主の身の回りの世話をする小姓がいます。残念ながら小姓の日記は残っていませんが、「御小納戸日記」は大量に残っております。「御小納戸日記」は、尾張と江戸の二種類に分かれています。藩主は参勤交代で尾張と江戸を行き来するため、尾張にいる時と江戸にいる時の藩主の動向が記録に残っています。

今回は、十二代藩主<sup>なりたか</sup>斉荘の生活ということで、天保十四年（一八四三）の日記を分析した研究の一端を見てみたいと思えます。

斉荘は、午前七時頃に「御寝之間」で起床し、午前十時頃に表に出ます。まず表の空間に出て何をしたかと言いますと、先祖の位牌が置いてある「御祠堂」で、焼香を毎日しております。

その後、政務に移っていきますが、藩主が日常的に会うのは年寄や用人といった重役クラスのみで、一般の家臣と会うことはほとんどありません。藩主に会えないと謁見することすらできませんので、月のうちの一日、十五日、二十八日の三日間、藩主にお目見えする「月次御礼<sup>つきなみおんれい</sup>」が設けてありました。当時は格式社会ですので、格式に応じた形でお目見えが行われます。格の高い順番から見えますと、まずは「中御座之間」で年寄や御用列の人々とお目見えを行います。次に「焼火之間<sup>たきびのま</sup>」で年寄列の人々や初出仕の家臣とお目見えを行います。これが終わりますと、「夜詰之間」

でその他の家臣達とお目見えを行います。格式の低い家臣は、藩主が移動するときの通りがかりの時に、お目見えを行っていました。お目見えにも様々な形がありました。

八月四日の記事から、齊荘が「水之間」で木曾山の模型を見ながら、役人から材木について説明を受けていることがわかるなど、藩主の生活の一端を知ることができます。「御小納戸日記」は大量に残されていますので、丁寧に見ていけば、もっと色々わかるかもしれません。

次に、儀式について見ていきたいと思えます。「進饌要覧大全」という史料があります。進饌とは御膳を進めるという意味で、必ずしも儀式の詳しい状況がわかるわけではありませんが、図が付いており、そこから儀式の状況を探ってみたいと思えます。

まずは、年初の挨拶である「年頭御礼」について見ていきたいと思えます。太刀と馬代を献上できる「太刀馬代御礼以上」の役職の家臣は、一人ずつ藩主にお目見えすることができました。場所は対面所（書院）で、藩主の後ろに側近、左側に刀掛け、縁側に年寄達が列挙し、さらにその遠方にも家臣達が並んでいました。基本的には太刀を献上するのですが、中期には木製の飾り太刀を献上するようになり、形式化されました。太刀は、格の高い家臣ほど、藩主に近い位置に置くことができたと思われませんが、史料に書かれていないため、詳しくはわかりません。太刀の献上後、盃が下賜されました。「太刀馬代御礼以上」より下の役職の家臣のお目見えは、場所が対面所から広間に変わり、集団で行われます。その時の状況ですが、「鳳凰之間」に藩主が立ち、隣の「巢鷹之間」に家臣が集団で並びます。年寄二人が境の襖の両側に座り、襖を開けることでお目見えとなりました。その後、盃が下賜されますが、家臣が一人ずつではなく、三人ずつ前に出

てきて下賜が行われました。このように、役職の格によってお目見えの仕方にも違いがありました。

最後に、年中行事の「嘉定儀礼」について説明したいと思います。六月十六日に行われる「嘉定儀礼」は、藩主が家臣へお菓子を下賜する儀式でした。場所は対面所で、一之間と二之間に大量のお菓子が置かれていました。上段に藩主が座り、縁側には縁起物が飾られていました。家臣は七間廊下を渡って菓子を賜ります。役職が城代以上の家臣は一人ずつ、城代より下で「太刀馬代御礼以上」の家臣は六人ずつ、「太刀馬代御礼以上」より下の家臣は九人ずつで菓子を賜りました。

本日は時間も限られていましたが、史料から色々なことがわかりました。ぜひ徳川林政史研究所においでいただき、様々な史料を活用していただければと、切に願っております。

本日は御静聴いただきまして、ありがとうございました。

〔付記〕

講演会では、「名古屋城における尾張藩主について」の演題でお話しいただきました。